

町長日誌 No.202



町長日誌の第 202 号です。町長が日頃町民の皆さんと話し合ったことや色々な出来事を町長自ら書いたものです。町民皆さんのご意見・ご要望・ご感想をお待ちしています。

8月19日(水) AM10:00

子供たちの短い夏休みも終わり元気に登校する姿になぜか心がほっこりします。テレビなどは毎日コロナ感染者が〇〇名と報道されますが、身近で感染者がいないため遠くの世界の事の様にも感じてしまいがちですが、この何とも言えぬ「もどかしさ」の中で今年のお盆を過ごされたことと思います。

強風のため8日となった「花火」ご覧になられたでしょうか？ 三密を避けることから風車の横で打ち上げました。また、市街では打ち上げられない大型の花火300発を20分掛けゆっくり打ち上げてもらいました。古来、「花火」や「夏祭り」は疫病（コレラ・流感）などで亡くなった人々の魂を鎮めるためのもので、基本「火」を使います。青森のねぶた、秋田の竿燈、祇園祭など夜に明かりを灯した山車や提灯などを使うのはそのためです。特に花火はその最たるもので、まさにコロナと言う疫病に早く打ち勝ちたいという思いを込めた打ち上げでした。打ち上げ関係者の皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

8月11日(火)

北見市においてオホーツク圏活性化期成会・土地連オホーツク支部・旭川紋別高規格道路建設促進期成会など管内の様々な要望団体が分刻みで武部新代議士への要望会を行いました。本来であれば7月に札幌の北海道開発局を皮切りに東京霞が関の国土交通省や農林水産省などと永田町（国会議員）へ要望するため出向くのですが、東京の今の状況から全て中止となりました。そこで省庁へは要望書を郵送し、まとめて代議士に地元で要望を行ったものです。管内の各市町村が抱える様々な課題をより早く解決するための来年度予算を如何に確保するか、戦後最悪の景気後退と言われ税収も減少しますので、来年度は厳しい予算が予想されます。

8月15日(土)

「終戦記念日」、今年で75年の歳月が過ぎました。毎年この時期には様々な特集番組や記事が生まれ、100歳近い体験者が登場したりします。私は今年二つの事実を知りました。まず、昭和20年7月14日函館が空襲されたのですが、その時青函連絡船24隻が米軍に撃沈されたことを知りました。しかもこの連絡船は石炭を燃料とする本州の工場への移送用として改造された特殊な船で、この空爆により軍需工場の燃料の8割が入手出来なくなり、結果的に戦争終結を早めたというのです。当時は道産石炭が頼みの綱だったのです。もう一つは日米開戦後、連戦連勝であった日本軍が敗戦へと流れを変えた戦いが「ガダルカナル島の戦い」であったと言います。敗戦の原因は現地の情報を東京の参謀本部が信じなかったためと言われていますが、戦死者約2万人のうち約1万1千人が餓死とマラリアによる死亡でした。南方での戦いは「蚊」との戦いであることは両軍とも知っていましたが、当時殺虫剤の原料である除虫菊は日本が世界一の生産量でアメリカに8割を輸出していたのです。しかし米軍は日本との戦いに備えアフリカで除虫菊栽培を行い、しかもエアゾールタイプの殺虫剤を兵士に配っていました。一方日本の除虫菊栽培は米国への輸出が出来なくなっても政府は対策を打たなかったため生産は激減し、結果として兵士への蚊取り線香配布もままならず、まるで蚊に負けたような戦いでした。余談ですが、この戦争を生き抜いた兵士が戦後蚊取り線香の「キンチョウ」にエアゾール式の殺虫剤の開発をアドバイスしてスプレース式の殺虫剤開発に繋がったことも知りました。

この話を知り、コロナの死者数が世界でダントツに少ない日本ですが、国民はマスクを着け三密を避ける努力を命令されなくてもするのですが、国が国民を守るための予防対策は後手後手が多く、結果として戦後最大の景気後退となり感染者が増え続ける現状は75年前の状況とあまり変わっていないような気がした私でした。

さて、今年の残暑は9月も厳しい予報ですが、気になるのは台風の少なさです。サケ漁や飼料用トウモロコシの収穫の季節、穏やかな秋を願うばかりです。では、また。

お便りをいただく場合は、適当な便箋等を封筒など（使い古しのもので構いません）に入れ、封をして、町役場窓口か、お知り合いの町職員にお渡し願います。町長のみ開封とし、お返事をさせていただきます。不明な点は、総務課総務厚生係まで。TEL 82・2131です。

